

東北地方太平洋沖地震に伴う農作物被害の技術指導について(第4報)
—水田における農業用水の不足や遅れへの対策(主として水稲6月植え対策)—

平成23年3月28日

農林水産部担い手支援課

遅い田植えは「最低でも出穂後25日間の用水確保」できるほ場で「コシヒカリ」

水稲作期が遅れるので茎数確保が困難になり、収量減少のおそれがある。多施肥では補えずかえって倒伏の危険が増す。登熟期水不足は著しい減収や品質低下をもたらす。

「ふさおとめ」、「ふさこがね」の遅植えは茎数不足による減収が大きく、栽植本数の見直し等では補えないので避ける。

1 水稲から大豆等に転換する場合の留意点

- (1) 大豆等の畑作物に転換する場合は、田から隣接する転換畑への水の移動を防ぐため、「ほ場の団地化」を基本にする。
- (2) 大豆については、は種や収穫・調製の作業に必要な機械・施設を勘案し、作業委託を視野に入れて準備を進める。栽培法については、従来の技術資料(「大豆栽培の新技术」農林水産技術会議平成15年3月発行など)に基づく。

2 水稲遅植えの留意点

- (1) 水稲品種選択の考え方

5月中旬以降に田植えする場合、「ふさおとめ」や「ふさこがね」では栄養成長期間の不足に伴う茎数不足が収量に与える影響が大きいため、品種は「コシヒカリ」を選択する。特に、6月植えの「ふさおとめ」、「ふさこがね」は極度に減収する。

- (2) 田植えが遅い栽培の技術の目安

5月中旬以降に田植えする場合の水稲栽培技術は表1～表4を目安にする。

表1 想定される生育ステージ(千葉市緑区の場合)

移植期	幼穂形成期	出穂期	成熟期
4月下旬～5月上旬	7月第1半旬	7月第5半旬	9月第1半旬
5月中旬	7月第2半旬	7月第6半旬	9月第2半旬
5月下旬	7月第3半旬	8月第1半旬	9月第3半旬
6月上旬	7月第4半旬	8月第4半旬	9月第5半旬
6月中旬	7月第5半旬	8月第5半旬	9月第6半旬
6月下旬	8月第1半旬	8月第6半旬	10月第2半旬

表2 収量と収量構成要素の目標値

移植時期	目標収量(kg/10a)	穂数(本/m ²)	一穂粒数(粒)	m ² 当たり粒数(粒)	登熟歩合(%)	千粒重(g)
4月下旬～5月上旬移植	600	400	85	34,000	85	21.0
5月中～下旬移植	510～540	280～320	90～100	28,000～30,000	85	21.5
6月上～下旬移植	330～420			25,000～30,000	70	20.0

表 3 施肥量の目安(壤土の湿田の場合)

移植時期	窒素		りん酸	加里	
	基肥	穂肥	基肥	基肥	穂肥
4月下旬～5月上旬移植	3kg/10a	3kg/10a	8～11kg/10a	7kg/10a	3kg/10a
5月中～下旬移植	1.5kg/10a	3kg/10a	8～11kg/10a	7kg/10a	3kg/10a
6月上～下旬移植	0～1kg/10a	3kg/10a	—	—	3kg/10a

表 4 各作業等の留意事項

移植時期	ほ場選択	育苗	施肥	移植	除草	病虫害防除	用水
5月中旬～6月下旬共通	●用水期間の延長の可能性等について土地改良区に確認する。	●稚苗移植の場合、田植え予定日の14～18日前には種する。 ●高温期の育苗なので、育苗ハウスの温度管理に注意する。	●生育期の気温が高いために慣行に比べて移植期から幼穂形成期の期間が短くなる。このため、全量一発肥料の使用は避ける。 ●表3の施肥量を目安にして基肥を施用し、葉色から穂肥施用の有無・時期・量等を判断する。 砂土の場合は、基肥窒素量を表3の値より1kg程度上乘せする。	●疎植では減収しやすくなり、青未熟粒が多くなって玄米中粗たんぱく質含有率が高くなるので、「栽植密度は55株/坪以上」にする。 ●6月植えの場合、疎植は極端に減収する。 ●「1株植付本数は5本以上」で「栽植密度は55株/坪以上」にする。	●雑草発生に好適な温度条件で移植まで長期間を経過するので、雑草発生密度を低下させるため、何度も耕耘する。 ●雑草がある程度発生した後、代かきで土中にすき込み、その後に除草剤を散布する。 ●温暖な時期に雑草が急速・活発に発生するので、水稻葉齢が十分に進んでいないこと及び農薬使用基準(使用時期)に注意すべきこと、を踏まえて適切な除草剤を選択して散布する。	●イネミズヅウムシやイネドロオイムシ等の初期害虫や斑点米カメムシ類の加害時期及びいもち病の発生時期等がこれまでと異なると想定されるので、ほ場を十分に観察して適期防除を図る。 ●分けつ盛期が梅雨期に当たるため、いもち病の発生が危惧される。多肥による過繁茂を避けるとともに、ほ場を十分に観察して適期防除を図る。	●幼穂形成期、出穂期及び成熟期がこれまでより遅くなるので、灌漑も例年より遅い時期まで必要になる。 登熟期間中の灌漑水の不足は、著しい減収や品質低下につながる。最低でも出穂後25日間の用水確保を図る。
5月中～下旬移植	●農業用水を5月上旬から9月上旬まで確保できる地区、ほ場を選定する。						
6月上～下旬移植	●農業用水を5月下旬から9月下旬まで確保できる地区、ほ場を選定する。						